

# CR Cancer Review

日経メディカル

2012.3.20

Spring

がん臨床医のサポーター

<http://medical.nikkeibp.co.jp/inc/all/nmk/cr/>



特集1

## スモール・イズ・ビューティフル? 希少がん診療の黎明

がん研有明病院遺伝子診療センター部長 新井正美氏

インタビュー

「がん研有明病院がHBOCの  
予防的切除を開始した理由」

特別  
座談会

## イレッサの軌跡に学ぶ 肺がん分子標的治療の未来



◆ リポート、コメンタリー、トピックス、ライブラリー

日経メディカル開発

# ルポ がん医療 の現場

遠隔地多地点連携カンファレンス

## Webを使った 遠隔地間カンファレンス 均てん化を目指す“もう1つ”の方法

症例に見入る渡辺氏と宮本氏。中央のパソコンの画像を大型テレビモニターに映している。

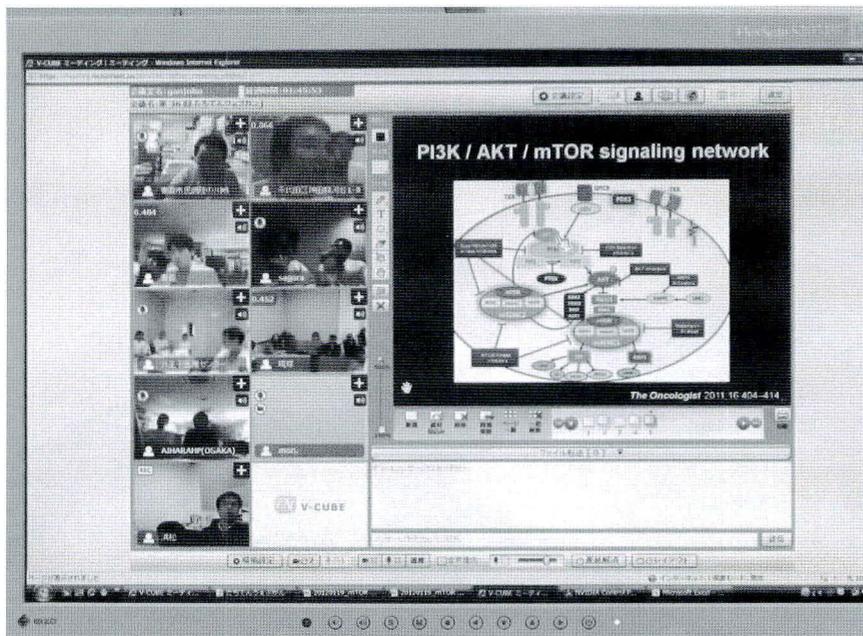
北は青森から南は沖縄までの全国の乳がん診療機関を結んだ多地点テレビ会議が定期的に行われている。がん診療の水準の地域間格差の解消を目的にがん診療水準の均てん化が国策として続けられているが、この自発的に生まれた草の根カンファレンスもがん診療の均てん化を目指す姿の1つといえるだろう。

1月某日夕方、場所は静岡県浜松市の浜松オンコロジーセンター。1日の業務を終えた院長の渡辺亨氏と薬剤師の宮本康敬氏（がん専門

薬剤師）が、テレビ会議システムの調整を進めていた。今日は、同センターが中心になって進めている“第36回たちてんウェブカンファレン

ス”の開催日だ。

このカンファレンスは、全国各地の乳がん診療に関わる施設を、パソコン、カメラ、ヘッドセットを使用してインターネットを介して会議を行うWeb会議と呼ばれる方式で進められている。渡辺氏によれば、「大学などの医局の枠にとらわれず、医療現場のスタッフが自由に課題を持ち寄り、討論する場」という



スライドなどの資料映像と参加者の顔や発言などの映像音声を複数同時にインターネットで共有できる。ここに登場しているのはV-CUBEというシステム。従来のテレビ会議に比べると画質は低いが、初期費用が安く、月次の契約が可能、新規の設備も必要ないところは草の根カンファレンスに都合が良いだろう。

ことになる。

開始予定時刻が近づくと、画面の左側の小さなウインドウに医師や看護師らの大小様々な顔が映り始めた。この会議に参加している全国の医療機関が接続し始めたことを意味している。顔の大きさの違いは、設置したカメラとの距離の違いを反映しているようだ。自分の机のパソコンのカメラを利用しているのか、医師の顔がウインドウいっぱいに表示されているのかと思えば、数人がソファーに腰を下ろして、こちらを見入る様子の画面もある。「こんばんは、よろしくおねがいします」「〇〇先生、お久しぶりです」。しばし、モニターごしの挨拶が飛び交う。

参加しているのは、北から青森県立中央病院、杏雲堂病院（東京）、東京医科大学八王子医療センター、相原病院（大阪）、相良病院（鹿児島）、宮良クリニック（沖縄）に浜松医療センターを加えた7医療機関だ。

この日のテーマは2つ。1つは症例の検討、もう1つは2011年の12月にサンアントニオ乳がんシンポジウム（SABCS）で報告され、注目されたBOLERO-2試験に関するレビューをすることだ。

### 手術か薬物療法か

この日は宮良クリニック院長の宮良球一郎氏から提供された症例検討から始まった。

症例は女性の炎症性乳がん患

者で37歳。検査ではLuminalB、HER2陽性と判断されたが、抗HER2抗体薬のトラスツズマブで効果が出ない。1カ月前の回目の会議でも提示された症例で、治療法の実行が難しい症例だった。どのように治療をすればよいか、宮良氏はまだ迷っていた。

宮良 前回の会議では、もう一度HER2抗原を調べなおすというアドバイスがありましたので、調べなおしたところFISH法では7.1と強陽性でした。生検でもやはり、Luminal Bでした。EC療法（エピルピシン+シクロホスファミド）では効果があり、1180mgまで使いました。

細かいやり取りのあと、実際に行うような治療法を選択すべきかというテーマに移ったところで、渡辺氏と参加していた相原病院副院長の相原智彦氏との間で白熱した議論になった。

渡辺 トラスツズマブ単独で効果が出ないのであれば、最近流行のクロストーク理論を踏まえて、ホルモン療法とトラスツズマブの併用はどうか。ゾラデックスとアロマターゼ阻害薬をトラスツズマブの併用はどうか。

宮良 トラスツズマブではなくラパチニブを使うというのはどうでしょうか。

渡辺 それでも良いと思います。

**相原** ECを続けながら手術と放射線照射を行うことも考えていいのではないのでしょうか。

**宮良** それもシナリオに入っています。

**相原** 局所コントロールできれば、治癒も望めるかもしれません。

**宮良** 局所進行であることを考えればその可能性もありますね。

**相原** 手術、放射線照射を行った後で内分泌療法とトラスツズマブを併用する選択もあります。

切除の方針が浮上したことで渡辺氏が発言する。

**渡辺** 切除しても断端陽性となり、半年後に再発ということになりはしませんか。

**相原** 放射線照射は行って、治癒を目指す。治癒の確率は分かりませんが、現状では治癒が望めます。

**渡辺** 巨大な腫瘍ができていたたまれない。とりあえず対応という気持ちは分かりますが、取れるときに取るという外科の発想は理解できません。

渡辺氏にやや強い表現に笑い声がもれた。

トラスツズマブとタキソールを投与して進行(PD)となった。再発乳がんと同様に考えて、トラスツズマブとラパチニブという抗HER2薬同士の併用はどうかという意見も出た。適応外であるが、一定の理解を示す参加者もいた。

相原氏は手術という方針にこだわりをにじませた。

「今後進展して手術するのであれば今のタイミングで手術するのがベスト。問題は手術をするかどうかですが、治癒を追求するならば手術を選ぶべきです」

渡辺氏が反論する。「メスが届かない範囲にがんが広がっている可能性が8割あります。手術するということでもいいのですか」。

**相原** 2割、治癒する可能性があるならば手術を選択すべきです。

**渡辺** 2割ならばほとんど勝ち目はないと考えるべきではないでしょうか。患者も納得するはずですよ。

**相原** そこ答えられません。まったく治癒する見込みがなければ手術は勧めません。

考えられる選択肢として渡辺氏は、手術+放射線療法、分子標的治療の後に観察、内分泌療法単独の3つを挙げた。

**宮良** (ホルモン受容体の)ER/PgRは80%染まっています。

**渡辺** ホルモンとHER2の両方のルートを抑えるべきではないでしょうか。

日本乳癌学会の乳癌診療ガイドライン(2010年版)では、診療ガイドライン委員長を務めた渡辺氏に対して、相原氏も診療ガイドライン薬物療法小委員会の委員に名を連



浜松オンコロジーセンターで使われているカメラ。ペットボトルを利用したカメラスタンドは、手作りカンファレンスの象徴だ。

ねている。学会を離れて、2人の論客の討論が、浜松と大阪に分かれて続いた。症例を提示した宮良氏は、手術に傾斜しつつ、化学療法についても検討し、次回のカンファレンスでまた相談したいと議論を引き取った。

## 適応外の薬も積極的に討論

症例検討に続き、mTOR阻害薬エベロリムスに関わる“教育セッション”となった。講師は浜松オンコロジーセンターの薬剤師の宮本氏。テーマはホルモン耐性進行性乳がん患者に対するエキセメスタン+エベロリムス対エキセメスタン単独療法の安全性と有効性とを比較した国際共同臨床第Ⅲ相試験であるBOLERO-2試験のレビュー。宮本氏がスライドを示しながら、試験の結果を説明していく。

「細胞内にあるmTORはエストロゲン受容体(ER)を活性化しホルモン耐性を促す一方で、インスリンの分泌不全を引き起こし、これが耐糖能異常の原因になります」

mTOR阻害薬については、日本国内ではエベロリムスとテムシロリムスの2剤が腎細胞がんの治療に使われ、2011年にはエベロリムスの隣神経内分泌細胞(pNET)への使用が承認されている。しかし、乳がんについては、まだ臨床現場に導入されていない。

BOLERO-2試験では、主要評価項目となった無増悪生存期間(PFS)で、エキセメスタン単剤に対してエベロリムス併用群は7.4カ月で、ハザード比0.44という成績だった。乳がん治療医の観点から、内分泌療法抵抗性となった乳がん患者に有効性を示した同薬に対する関心は高いようだ。自主独立のカンファレンスだけあって、様々な意見が出る。

「Journal of Clinical Oncology誌にメトホルミン(糖尿病薬)にmTOR阻害活性があると報告が出た。メトホルミンを使用してもよいのか」

「メトホルミンは低血糖にならないようだから、乳がん患者に使うことも可能ではないか」

「有害事象の心配がないならばゲリラ的に使ってみてもいいのではないか」

「メトホルミンにはアンチエイジング効果が期待できるという報告

もあるが、どうなのだろうか」

## 自由な意見交換が 地域格差の是正に貢献

日本のがん診療では地域格差の存在が問題視されてきた。政府はがん診療連携拠点病院を認定し、がん診療の均てん化を促進、それは一定の効果を上げてきた。たちてんウェブカンファレンスは、国策と上るルートは違うが、目指すところは同じだ。

宮良氏は「エビデンスに従って医

療を進めるといっても、実際の臨床では明確なエビデンスがない問題にも数多く遭遇する。渡辺先生や相良先生などの指導的な立場にある先生方や民間病院として最多の症例を診ている相良病院の先生方と意見交換できることの意義は大きい。沖縄から東京に行くには大変な時間と労力がかかる。沖縄の患者さんに現在の標準治療を実践することができるということで、たちてんウェブカンファレンスは大切な機会」と語っている。

## 多地点連携カンファレンスの 過去の主なテーマ

### 2008年

- ・薬物療法に関する講義
- ・N/SAS-BC02試験
- ・HER2たんぱく質測定の意義

### 2009年

- ・ザンクトガレン2009の話題
- ・マンマプリント
- ・家族性乳がん卵巣がん遺伝子相談外来
- ・タイケルブの役割
- ・HER2陰性乳がんに対する術後化学療法レジメン
- ・乳がんにおけるポリソミー17
- ・サンアントニオ2009の話題

### 2010年

- ・Luminal乳がん治療の考え
- ・Ki67検査の再現性と有用性に関する検討
- ・遺伝子発現プロファイルの現状と使い方
- ・がん患者における嘔気・嘔吐対策について
- ・早期乳がんにタキサンとアントラ

- サイクリンのどちらを先に使うか?
- ・トリプルネガティブ乳がんとLuminalB手術可能乳がんに対する化学療法
- ・HPVについて
- ・リエゾン精神看護
- ・臨床試験
- ・ザンクトガレン2011の話題

### 2011年

- ・ザンクトガレン2011の話題
- ・Ki67を中心に見たそのほかのパラメーターと病理学的な関係の検討
- ・ASCO2011
- ・抗がん剤の支持療法
- ・遺伝性相談外来における家族性乳がん・卵巣がん症候群(HBOC)患者の対応について
- ・ハーセプチンの保険適応前の症例に対する適応について
- ・Ki67について(病理医たちの差について)
- ・サンアントニオ2011の話題